

Title	リカアドオ原論解題補遺
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.5 (1927. 5) ,p.628(46)- 670(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19270501-0046
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270501-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカアドオ原論解題補遺

小泉 信三

リカアドオの價值論が利潤率の平均を前提として始めて成立することは、既記の通りである。然らば、此の平均利潤率其者の高低は、果して何に由て決定せられるか。リカアドオは、其の究局的説明を土地の餘剰産出力に求めた。若し土地の收穫が僅に耕作労働者自身を養ふに過ぎなければ、全く利潤發生の餘地はない。此以上の餘剰が生産せられて始めて利潤が成立し得るのである。併し土地の肥瘠に由て其の餘剰産出力に差等があれば、此の收穫の差額は地代を構成する約束であるから、農業資本の利潤を決するものは即ち現在耕作せらるゝ最劣等地(限界地)の餘剰産出力である。而して此の限界地餘剰收穫の農業資本に對する比例が農業利潤率を決定し、農業利潤率が資本の自由流動に由て、一般商工業利潤率を決定する。従て人口増加の爲め新に豊度更に劣れる土地に耕作が及べば、餘剰收穫

は減少し、従つて一般利潤率も減少し、若し耕作労働者の生活費以上に何等の餘剰を生せぬ土地を耕さねばならぬ處迄行けば、農業上に於ても工業上に於ても利潤は皆無となるのである。

斯く土地の産出力が農業利潤率を決定し、農業利潤が一般利潤率を決定するといふ説は、商工業利潤率も亦た農業利潤率を左右し得ると主張するマルサスに對して、リカアドオの特に力説反覆する所であつた。彼れは友人トラウアに自己とマルサスとの間に於ける意見の相違を約言して左の如く言つた。「一國に於ける資本が増加し、而して資本使用の方法が既に存在するか或は同一比例を以て増加する場合には、利率及び利潤率は下落せぬであらう。利子は資本使用の方法が資本其者に對して前よりも大なる比例を占むる場合にのみ騰貴し、資本がマルサス氏の所謂其使用の舞臺に對してより大なる比例を占める場合に下落する。是等の點に關しては吾々は皆な意見を同じうしてゐるものと信ずる。唯々予が主張するのは、農耕上の改良あるか、或は外國よりの穀物輸入の爲めに新なる便宜が提供せらるゝにあらずんば、如何なる國に於ても新資本の使用舞臺は資本其者と同

一又はより、大なる比例に於ては増加し得ざること、約言すれば、爾餘一切の業の利潤を左右するものは農業家の利潤であり、而して農業家の利潤は、苟も土地に投せらるゝ資本が増加すれば、同時に農耕上に改良の行はれぬ限り、必ず是と共に減少せざるを得ないのであるから、一切爾餘の利潤は必ず減少し、従つて利子は下降せざるを得ないといふことである (Pp. 4-5)。正統派經濟學の研究者ブライフスが頻りにリカアドオ分配論の樞軸をなすものが土地であることを力説するのは至當である。(Goetz Briefs, Untersuchungen zur klassischen Nationalökonomie, 1915 S. 67, 68. passim)

斯く農業利潤を定めるものは土地の産出力であつて、而して農業利潤を基準として一般利潤率が決定せられ、而してリカアドオの所謂一物の自然價格即ち其交換價值は此の平均利潤を其構成要素とするものであるとすると、リカアドオの謂はく、マルサス氏は一物の費用と價值とは同一ならざるべからずといふを以て予の見解となすものゝ如くである。若しも氏にして費用なる語に依て利潤を含む生産費を意味するものならば、其通りである。茲にリカアドオの分配論と其價值論との先後、若しくは其位置の主客果して如何の問題に逢着する。而して予の所

見を以てすれば、分配論が先にあつて、價值論が寧ろ後に來て居る。リカアドオは分配法則の決定を以て經濟學の主要問題となし、而かも其「原論」に於ては分配論其者に入るに先だつて、先づ詳細なる價值論を卷頭第一章に試みてゐるから、通常彼れの價值論は彼れの分配論の基礎となるものであるかの如く解せられるのは異しむる足らぬ。併し嚴密に考察すれば、リカアドオの價值論は其分配論の基礎となすに足らず、却て其分配論其者が價值論の前提となつてゐることを認めなければならぬのである。

第一に着想の先後に就いていへば、リカアドオが價值論の疑問に逢着したのは、既記の如く、一八一五年の「低廉なる穀物價格論」著作以後の事であつて、而かも彼れの分配論の骨子は、其前年穀物關稅問題が起つて以來のマルサスとの往復書信に既に示されて居るのである。「低廉なる穀物價格論」中には、成程價值論が挿入されては居る。併し「一切貨物の交換價值は、其の生産の困難の増大するに従つて騰貴する。されば、より多くの勞働が必要となること」から穀物の生産上に新しい困難

が生じ、一方金、銀、羅紗、麻布等の生産に要せらるゝ労働は増加しなければ、此等の物に比較しての穀物の交換価値は騰貴するであらう云々といふ一小節に先だつて、地代論利潤論は、既に與へられ居り、資本利潤が限界地の餘剩收穫に由て決せられること、地味劣れるが、位置比較的不便なる土地に逐次耕作を及ぼすことに依つて、地代は前に耕された土地に生ずべく、且つ利潤が下落すると正に同一の程度に於て爾かすること、……地代は有ゆる場合に於て、前に土地上に於て獲得せられた利潤の一部分であつて、斷じて新なる収入の創造でないこと等は既に價值論を待たずして説明せられてゐるのである。

併し乍らリカアドオが穀法論争の開始以來繰返し主張し力説する所は、利潤は賃銀に由て決せられ、賃銀高ければ利潤尠く、賃銀廉ければ利潤高しといふ一事である。此は價值論を根據にしなければ成立しない主張ではなからうか。利潤と賃銀とが反對に上下するといふのは、リカアドオが賃銀を或物から控除した餘剰が利潤であると解して居るからである。然らば其の或物とは何であるか。若し其が生産物の價值であるといふことが出来れば、茲に價值論を基礎とする利潤論

が成立する譯である。併し利潤を斯くして説明せんが爲めには、一物の價值が其から控除せらるべき賃銀の高下と無關係に、獨立して決定せらるゝことを證明しなければならぬ。若し例へば、一物の價值は其物の生産上に投入せらるゝ労働量に由て決定せられ、労働者が果して其の幾分一を收得するかは毫も價值の大小には影響せぬと斷言することが出来れば、價值論は利潤率の缺くべからざる前提となるのである。

リカアドオも原論中價值論の章の始めには、此意味に解せらるゝことを謂つて居る。諸貨物の交換価値は、其各自に或は直接投入せられ、或は生産要具を通じて間接に投入せらるゝ労働量に由て決定せられ、而して此理は生産用具の使用者が其所有者と同一人なるか否か、又生産物が生産用具所有者と其使用者、即ち資本家と労働者との間に如何なる比例を以て分配せらるゝかに由て動かされるものではない。「資本利潤の大小、その五〇%、二〇%、一〇%たるを問はず、又は労働賃銀の高低如何を問はず、兩の業に對して均等の作用を加へるであらう」と謂ふのが其である (1st. ed. p. 18)。併し是は姑らく資本耐久性の異同を無視しての論であつ

て、此異同を顧慮すれば、賃銀の騰落が貨物の價值に影響することをリカアドオは認めざるを得なかつた。それが如何に影響するかといへば、これも既述の如く、其生産上に比較的多くの固定資本か或は比較的耐久性大なる固定資本の使用せらるゝ貨物の、然らざる貨物に對する交換價值は、賃銀と反對に變動し、賃銀騰貴する時は下落する、...といふのである。然らば、是等のものゝ相對價值が賃銀の變動と反對に上下するのは何故であるかといへば、それは利潤が賃銀と反對に高下するからである。リカアドオは茲で、賃銀の騰貴及び其結果たる利潤の下落...といつて、此の兩者の關係を説明を俟たぬ自明の事の如くに取扱つて居る。彼れは一例を按じて、百五十磅の固定資本十年の使用に堪ゆと五十磅の流動資本とを備ふる獵師の生産物と、五十磅の固定資本と百五十磅の流動資本とを有する漁夫の生産物との交換比率が、百分六の賃銀騰貴の爲め 100:218 から 100:233 に變ずることを説明して居る。而して其説明は、畢竟賃銀百分六の騰貴の爲め資本利潤が一〇%から四%に下落するといふ所に求められるのである (Ibid. pp. 3133)。リカアドオの價值論に其利潤論の根據を求めんとする者は、茲に利潤に由てする價值其者の變動の説明を見出すのである。

リカアドオは價值と賃銀との關係に就いて結論を下して、...如何なる貨物も單に賃銀騰貴の故を以て絶對價格騰貴することなく、...その生産上固定資本の用ゐらるゝ一切の貨物は賃銀の騰貴と共に常に騰貴せぬ許りでなくて、却て絶對的に下降するものゝ如くである。又貨物の價值は眞實の賃銀騰貴の結果引下げらるゝことあるものゝ如くであるが、斷じて此原因の爲めに引上げらるゝことなし (pp. 42, 48)。な...と言つた。賃銀騰貴の爲め或貨物の價值が下降するといふのは、反對の側面より見れば、其貨物と交換せらるゝ他の貨物の價值が騰貴することに外ならぬ。彼れが此の價值下落の一面を力説して、價值騰貴の一面を言はなかつたのは何故であるか。是れに就いては、ホランダアの解釋がある。リカアドオは是より先き賃銀の騰貴が利潤減少の唯一の原因たることを反覆主張して居つた。而して此學説を成立せしめる爲めには、資本家が其生産物の賣價を賃銀騰貴を償ふ丈けに引上げることが不可能なることを證明しなければならぬ。リカア

ドオが、一物の價值は賃銀騰貴の爲めに騰貴せぬ許りでなく、却て下落することがあることを強調して言つたのは是が爲めであるといふのである(Hollander, p. 90)。若し果して然らば、リカアドオは價值論に由て其利潤論の基礎を築かんとしたものである。此解釋は、リカアドオの意圖の推測としては當つてゐるかも知れぬ。併し或物の價值が賃銀騰貴の爲め却て相對的に下落することありといふことは、論理上少くもリカアドオの場合には、利潤論の爲めの準備となるものではない。是を説明する爲めにリカアドオは、最後に證明せらるべき筈の利潤論其者を先づ借りて來てゐるからである。固定資本が重きを占める産業の生産物が賃銀騰貴の爲め價值が下落するといふのは、彼れが賃銀の騰貴は即ち利潤の下落を意味するものゝなし、固定資本は放下の時間長きに亘るものであるから、利潤が下落すれば、生産上に固定資本を用ゐること多き貨物の價值は相對的に下落するといふに外ならぬものである。即ち價值に由て利潤が説明されるのではなくて、利潤に由て價值が説明されてゐるのである。

若しリカアドオが價值論から出發して利潤論に到達せんとしたのであつたならば、彼れは正に説明を要する或者を以て其説明其者の用に充てたものであることはリカアドオ批評家のアモンも之を指摘して居る。リカアドオは原論第三版に斯ういふ例を引いて居る。甲乙二人があつて、一年間労働者各百人を雇傭して機械を製造せしめ、更に第三の丙があつて、一年間同數の労働者を傭つて、穀物を作らしめるものとし、更に第二年に於て、甲乙二人は其の第一年に造らしめた機械を利用し、更に労働者各百人を傭つて甲は羅紗、乙は綿布を織らしめ、丙は第一年と同じく引續き一百人の労働者に穀物を作らせたものとする。投入労働量のみを念頭に置いて考へれば甲又は乙の機械と羅紗と、又は機械と綿布との價值合計は、丙の穀物の一倍なるべき筈であるけれども、事實は二倍以上に上るであらう。蓋し毛織業又は綿織物業にあつては、其資本に對する第一年の利潤が其資本に加へられるが、農業家にあつては其事がないからである。されば其資本の耐久力の度を異にする爲め、或は——畢竟同一事に歸着することであるが、——一種の貨物が市場に販出せらるゝ迄に經過しなければならぬ時間の爲めに、此等のもの、價值は、精確にそれに投せられた労働量には比例せぬであらう、それは一に對する二で

はなくて、價值多き方のものが市場に齎さるゝ迄に經過するより、長き時間を償ふ爲め、多少は以上となるであらう。(p. 30)

斯く價值を利潤に由て説明してゐるのであるから、其利潤を價值を以て説明する譯には行かぬ。アモンは謂ふ、此等の例に於ては、勞働價值の變動及び其結果、生産物價值の變動は、差當り最早問題でなくて、一の別の要素が説明の爲に輸入される。即ち利潤がそれである。是に従へば、『利潤』は此場合生産に必要な勞働量に由る財貨交換價值形成上に於ける修正の原因でなくてはならぬ。併し何處から『利潤』は生ずるか。如何にして、羅紗製造者及び綿布製造者の資本に對する第一年分の利潤が彼等の資本に加へられるか。何故に生産者は利潤を收得し、なければならぬか。羅紗製造者と綿布製造者との資本に、利潤が加へられるのは、恐らくは正にそれが別の原因からより、高き價值を取得したからではないが。利潤は恐らく其自體資本を用ゐると資本を用ゐずして製造せられたる、或は多くの資本と少なき資本を以て造られた財貨の價值の異同よりしてのみ説明せられ得るものであらう。或は此の價值異同と利潤——價值差額としての——とは、同一現象を

示すものである。即ち議論全體を循環し、若しくは一の *petitio principii* から出發して居る。利潤の現象は、茲でも又單に事實上の經驗から取られて居る。是に由て問題させられ且つ主張せらるゝ交換價值形成上の修正、即ち始めに打ち立てられた交換價值形成の根本法則からの離背の主張は、其自體先づ説明を必要とする或物に由て説明されるのである。(Alfred Amonn, Ricardo als Begründer der Theoretischen Nationalökonomie, 1924. S. 44)

以上予はリカアドオの分配論は、リカアドオ自身の意圖如何には拘らず、其價值論以前に存在し得るものであり、彼れの價值論は其分配論の基礎となり得ぬものであることを説かんと試みた。リカアドオ自身も或場合に、其分配論が價值論を俟たずに成立し得ることを認めてゐるのは、注目を要する。即ち彼れは一八二〇年六月十三日マカロツクに與へた書簡の中に價值を決定する原因が勞働量と時間との二つなることを述べた後に斯う明言して居るのである。要するに地代賃銀及び利潤の大問題は、全生産物が地主、資本家及び勞働者の間に分配せらるゝ、比例に由て説明されなければならぬ。而して此事は價值學説と本質的には關係し

て居らぬ。吾々は最後に投せられた資本を以て生産せられた穀物、及び製造工業に於て労働に依て生産せられた一切貨物に就いては、地代を排除し得るのであるが、斯くすることに依て資本家労働者間の分配は、遙に簡單の問題となる。労働の成果の労働者に與へらるゝ部分愈々大にして、利潤率は愈々少ならざるを得ず、又反對ならば反對の結果がある。然るに此部分は本質上労働者必需品生産上の便宜に由て決せられなければならぬ。便宜若し大ならば、何なるを問はず、資本及び労働の結果たる一貨物の一小部分が労働者に必需品を給するに足り、従つて利潤は高いであらう。(Letters to McCulloch, p. 72)。

リカアドオの分配論は、最後に耕さるゝ土地、若しくは最後に土地に投せられた資本の收穫は労働者と資本家との間に分配せられて、地主は之に與からぬことを明にし、従つて其處から穀物の價格は地主の地代收得の爲めには騰貴せぬといふ結論が生ずる。茲でも分配論は、價值論に先行して居るのである。オツペンハイマアがリカアドオの價值論價格論は、一面其の全理論の中心たると共に、他面此の價值理論は其前提たる地代論と共に立ち共に倒れる」といつたのは至當である

(F. Oppenheimer, David Ricardos Grundrententheorie, 1909. S. 110)

既述の如く、リカアドオの全分配論の基礎となるものは、土地と人口と而して自由競争から生ずる利潤率の平均である。人口數は、之を養ふ爲めに生産しなければならぬ穀物量を定める。此の穀物量は、幾許の土地を如何なる集約程度に耕さねばならぬかを定める。是に由て、耕作限界に位する土地が幾許の生産力を有するかが定められ、此限界地の收穫から賃銀を控除したものが、利潤となる。賃銀は人口法則の作用に由て労働者の生活必要費に歸着する。自由競争に由て農工商業を通じての平均利潤率が成立する。土地收穫から此の平均利潤と賃銀との合計を控除したものが地代として地主の手に歸する。任意再生産し得べき諸貨物は、其生産に参加した労働の賃銀と資本の利潤との合計を其自然價格として相交換される。これがリカアドオの理論に由る分配と交換との「自然的状態である。此の「自然的状態を推移せしむるものは、人口の増加である。人口が増加すれば、耕作が擴張せられて、産出力劣る土地に及ぶ。限界地の收穫が減少するから、勞

働者生活費を其から控除した餘剰即ち利潤が減少し、一般利潤率が下降する。利潤の減少した丈け地代が増加する。利潤率が下降したので、固定資本を使用することの多い生産物の價值は、下落する。リカアドオの自身引例に従へば、固定資本を用ゐることの尠ない農産物の製造工業品に對する相價值は、投入労働量の増加と利潤率下降との二重の原因の爲めに騰貴する。斯くして第二の「自然的状態」が實現される。更に人口が増加すれば、更に耕作限界は擴張せられ、利潤率は更に下降し、地代は更に増加し、農産物の製造工業品に對する價值は更に騰貴するのである。此發展は何處まで續けられるか。耕作限界が擴張せられて、遂に其收穫が働者の生活費以上に剩す所皆無なるところ迄行けば、利潤は消滅して、所得は僅に賃銀と地代との二種となり、又利潤が消滅するのであるから、労働が投せられてから生産物が市場に販出せられる迄の時間の長短は、其價值に影響しなくなつて、獨占財を除く一切貨物は投入労働量に比例して相交換せらるべき筈である。それでも猶ほ人口増加が止まらなかつたならば、何うなるか。既に限界地は僅に労働者自身を養ふ丈けの穀物しか産出しないのであるから、是以上に資本を土

地に投じて穀物生産量を増加せしむることは不可能である。そこで穀物は獨占貨物となつて、限界地に於ける生産費を超過する獨占價格で賣買さるべき筈と考へられる。而してリカアドオは二三の機會に、穀物が獨占價格で賣買される時は、即ち耕作限界地若しくは土地に投せられた資本の最終部分が地代を生ずる時だと謂つた。「詢に一國の穀物並に原生産物は、暫くの間は獨占價格で賣れることがあり得る。併しそれが永久的にさうであるのは、最早資本を有利に土地に投ずることが出来なくなり、又従つて其生産物を増加することが出来なくなつた場合に限るのである。斯る時に於ては耕作せらるゝ土地の各部分、土地に投せられた資本の各部分が、尤も収益の差額に應じて多少はあるけれども、兎に角地代を生ずるであらう併しリカアドオの立場から言つて、斯る場合は果して起り得るものであるか。是れは即ちリカアドオが地味の肥瘠に由る收穫の差等及び收穫遞減に由る收穫の差等に由る較差地代の外に、耕作限界に生ずる絶對地代を認めたか否かの問題である。而して予の所見を以てすれば、リカアドオが絶對地代の成立を認めたと解釋すべき文言は確に指摘し得るけれども、是は實はリカアドオの理論全

體と相容れぬ不用意の文言であつて、リカアドオとしては、較差地代以外に地代の發生を認めることは出來ない筈なのである。

絶對地代を發生せしめる穀物の獨占價格なるものは、利潤が消滅する迄土地耕作が擴張せられて猶ほ其以上に人口増加が續けられた場合始めて成立するものである。併し斯る場合に猶ほ人口の増加するといふことが果して可能であるか。リカアドオは生活に餘裕ある限り人口は増加するを解して居る。生活に餘裕があるとは、畢竟勞働の市場價格たる賃銀が其自然價格たる生活必要費以上に超過することを謂ふに外ならぬ。賃銀と勞働の自然價格との間に開きがあれば、人口は増加して賃銀を下降せしめるが、人口の増加の速度が勞働に對する需要増進に追及することが出來なければ、賃銀は生活費以上に保たれ、従つて人口は相續的に増加する譯である。然るに勞働に對する需要は資本の蓄積に由て決せられるのであるが、資本の蓄積を促すものは利潤の刺戟である。人口増加に連れて漸次瘠地が耕作されれば、利潤率は下落するから、資本蓄積の勢も亦た阻止されなければならぬ筈である。而して利潤が消滅すれば、資本の蓄積も當然已む。否な、リカア

ドオは利潤が皆無となる迄か以前に蓄積は停止するを謂つて居るのである。而して蓄積の停止と共に、人口増加の刺戟も亦た失はれなければならぬ。蓄積が停止すれば、人口は勞働需要に追及して、賃銀は生活費と一致すべき約束だからである。故に土地が利潤の消滅する處迄耕されて、而かも猶ほ其以上に人口が増加すれば、穀物は獨占價格で賣買せられ、従て絶對地代も發生する筈であるが、上述の如く、斯る曉には最早人口増加の刺戟がない譯であるから、リカアドオの立場からいふと、永續的に穀物の獨占價格が成立するといふことは、起り得ず、従つて絶對地代といふものは發生し得ないのである。

斯く利潤が消滅し、國が資本並に人口の増加の極限に達した状態をばリカアドオは別の機會に「靜止状態(Stationary state)」を稱して居る。資本蓄積の努力は、社會進化の原動力である。併し一の人口原則と一の土地收穫遞減法則とが現行社會形態を必ず導く極點は、此の「靜止状態」であるといふのがリカアドオの結論である。

ブライフスは此の資本主義經濟形態の行詰まりの推究を下した所にリカアド

オの獨創を認め、此點に於て彼れとマルクスを比較して居る。ブライフスに従へば、彼れが經濟學に寄與したものは、現行資本主義經濟形態克服の思想、即ち資本主義は全然別の經濟組織に變轉するといふ觀念である。「勿論リカアドオは此思想を明白には發展せしめなかつたが、併し彼れがそれを暗示した丈けでも充分である(彼の彼れが絶對的地代の可能性を容認する章句に於て) 與へられた前提を以て、彼れは容易く終局迄思考し得べきである。リカアドオにあつてもマルクスに於ける同じく、資本主義社會は内在的法則に従つて發展する。リカアドオの場合も、マルクスの場合も、蓄積の促進といふ同一の過程が、後者にあつては資本の餘剩價值吸收なる形に於て、前者にあつては、實物及び價值生産物の全體中の地代の爲めに吸收せられる部分の不斷の増進なる形に於て、發展する。リカアドオの場合も、マルクスの場合も、資本主義制度を驅つて其自身の前提と兩立し難き點に至らしめる精力源泉は資本の盲目利潤本能である。茲に至つてマルクスは遙にリカアドオ以上に歩を進めて居る。而して彼れをして能く歩を進めしめた認識は、暴力は一の經濟力だといふ思想である。階級闘争の思想である。リカアドオ

は社會をして一切の餘剰が地代に吸收される點まで驅られ赴かしめ、而かも此の不幸なる將來の運命を免れる途として、其見出す所は僅に緩漫なる作用をなす自由貿易の一途あるのみであるが、マルクスはより急進的である。曰く「暴力は常に新社會を孕める舊社會の助産者である。暴力は一の經濟力である」(S. 1923)。此批評は注目に値するものである。併しリカアドオとマルクスとの間には、茲に指摘されて居らぬ重要な相違點がある。それは、マルクスにあつては、行き詰まりは、無限に發展する生産力と之を拘束する社會制度との衝突の爲めに起るのであるが、リカアドオにあつては、行き詰まりは反對に生産力減退の爲めに起る。拘束するものは自然(土地)であつて、拘束されるものは人間(人口)である。矛盾は人間對自然の間に生ずるのである。故にリカアドオの場合には、行き詰まるものは特定の社會形態ではなくて、人類社會其者である。マルクスに取つては、資本主義の行き詰まりは、歓迎すべき新社會出現の前提であるが、リカアドオに取つては、現行社會形態が行詰まれば、其が一切の終局であつて、新局面の展開は不可能である。リカアドオが豫見したのは、資本主義の終末ではなくて、人類社會其者の終末であ

る。茲にリカアドオの悲觀主義がある。此點に於ては、オツペンハイマアが資本蓄積の爲めに結局利潤が消滅して蓄積其者が不可能なる時を、資本主義の終末とせず、之を稱するに「世界の終末」人類社會の「日没」(Götterdämmerung der menschlichen Gesellschaft)等の言葉を以てしたことは、當を得たものであると信ずる (Oppenheimer, S. 75)

「静止状態」への到達を遅からしめるものに機械の採用がある。

機械採用の結果として農産物收穫が増加すれば、利潤率は上進するか、少くも其下降が阻止せられる筈である。たゞ機械の採用が労働者に及ぼす影響に就いてはリカアドオは原論第三版に至つて新に挿入した機械論第三十一章に前と異なる意見を發表した。彼れは前には、機械採用の爲め人間労働の一部分が不用になるとは認められ、斯くして職を失つた労働者は、容易に他に職を求めることが出来るから、結局機械採用の前と後に需要せられる労働量には増減がないものと考へてゐた。蓋し一生産業に新機械が採用せられた爲めに生産額が増加し

而かも生産物に對する需要が之に伴はなければ、労働者の一部分は必然解雇されなければならぬ譯であるが併し彼等を雇傭した資本は依然として存し、此資本は需要ある他の貨物の生産に投せられなければならぬ筈だと考へたからであつた (3rd ed. 4668)。一八二〇年一月は彼れがマツカロックに與へた書簡中に「機械の使用は、予は信ずる、決して労働に對する需要を減少せしむるものではない」と謂つて居るのを見れば、彼れが説を改めたのは無論此時以後の事ではなくてはならぬ。而して此點に於て彼れに影響を與へたものはバードンの小冊子「労働階級の状態に影響する諸事情に關する觀察」(John Barton, Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society. 1817)であつたらうと謂はれてゐる。

彼れが説を改めたのは、彼自身の謂ふ所に由れば、社會の純収入と總収入との關係に關する誤解を覺つたからである。彼れは社會の總収入の増加は其純収入の増加と並行し、従つて地主資本家の所得の源泉たる基金フンダと労働者が所得を仰ぐところの基金とは同時に増加するものと思つてゐたのであるが、今や地主資本家の

爲めの基金が増加すると同時に労働者の爲めの基金の減少することが有り得べきことを認めたのである。彼れの假設例に由れば、一人の資本家があつて、二萬磅の價值ある資本を以て農業と生活必需品の生産とを併せ營み、資本中の七千磅を固定資本、即ち建物道具其他に投じ、残る一萬三千磅を流動資本として使用して労働雇傭の用に充て、而して利潤率は一割で、資本家は年々二千磅の利潤を收めるものと假定する。資本家は年々一萬三千磅の價值ある食物其他の必需品即ち流動資本を以て生産を開始し、生産物を一年中に一萬三千磅の貨幣に對して自家雇傭の労働者に賣却し、又同期間内に同額の貨幣を賃銀として労働者に支給する。労働者は一年中に一萬五千磅の價值ある食物並に必需品を生産して資本家の手中に復歸せしめ、資本家は其中の二千磅を隨意處分する。此場合、此年の總収益は、一萬五千磅、純収益は二千磅である。然るに、第二年に於て一萬三千磅を支出し、労働者の半數をして機械の製作に當らしめ、残る半數を舊の如く食物並に必需品の生産に充てると如何なる結果を生ずるかといふに、此年に生産せらるゝものは、七千五百磅の價值ある機械と、同じく七千五百磅の食物及び其他の必需品とであつて、

資本家の資本は前と同じであらう。蓋し資本家は此の二つの價值額の外に七千磅の固定資本を有する筈で、之を總計すれば、資本二萬磅と利潤二千磅とを成すからである。今此の二千磅を自家消費用に控除すれば、資本家の流動資本で次年の用に供すべきものは、五千五百磅に過ぎぬことになる。従つて従來七千五百磅を以て雇傭せられた労働者は、全然不用となる譯である。資本家に取つては此場合、機械の援助に依り、前より少數の労働者を以て全資本に對する二千磅の利潤を擧げることさへ出来るならば、總収入の幾許なるかは問ふ所ではない。而かも人口を養ひ、労働を雇傭する力は、一國純収入に由らないで、常に其總収入に由るものであるから、機械採用の爲めに總収入が減少すれば人口は過剰となり、労働者は窮迫に陥ることを避け得ないのである。(pp. 468-471)

故にリカアドオは労働者が抱いてゐる、機械の使用は屢々彼等の利益を傷けるといふ意見は、決して偏見や誤謬に基づくものではなくて、經濟學の正しい原理に適へるものだと斷言した(p. 474)。資本が増加しても全然労働者に對する需要は増さぬとは言はぬ迄も、労働者に對する需要は資本増加と同じ比例では増さぬと

謂ふのである。

機械が労働者を不要ならしめるといふ説は、後にマルクスが更に發展せしめ、資本主義的蓄積の法則として之を説いた。資本の蓄積がその賃銀として支出せらるゝ可變部分と機械道具原料建物等に投せらるゝ不變部分との組合せ、即ち所謂資本の有機的組成を同じうした儘で行はれ、ば労働需要は蓄積と共に増進して賃銀を騰貴せしめるが、資本の蓄積が有機的組成を同じうした儘で行はれるといふことは稀であつて、資本家は市場の競争に落伍せざらんが爲め、蓄積の進行と共に機械原料に投ずる不變資本を多くして、可變資本を少くする。これが爲め資本が愈々蓄積せられて愈々失業者たる産業豫備軍が増加する。マルクスは斯う説いた。

反對に、リカアドオ以前のアダム・スミスは、機械採用の労働需要に及ぼす影響を全然問題にして居らぬ。スミスも資本を流動資本と固定資本とに分つては居るが、事労働需要の問題に關する處では、常に此の兩資本を一括して考へて、單に資本の大小が生産的労働の大小を決すると説き、國富増進の速かなる國に於ては労働

者の状態も亦た良好だと説いた。而して未だ産業革命の全經過を知らず、僅に手工業か、家内工業か、精々マヌファクツル(手工工場制)を觀察の對象としてゐた。スミスとしては、これが當然である。否なスミス以後に於ても、猶ほ久しく資本といへば之を賃銀資本の意味に解して、固定資本を看過することは往々にしてあつた。これは穀物騰貴の爲め農業資本が世間の問題となり、農業上に於ては機械採用は言ふに足らなかつたからだと解するものがある。兎に角リカアドオの如きも原論第一版の序文には、「：労働機械及び資本云々」と記してゐる位である。是は無論過失に相違ないが、併し當時の風潮は是にも窺はれる。(Cannan, Theories of Production and Distribution, p. 112)。リカアドオは原論第二版刊行以後に至つて機械採用の効果に着目して説を改めたのである。此點彼れが同じく機械採用の効果を考察して其價值論に修正を加へたこと、或照應をなして居る。而して價值論の場合に於けると同じく、機械論に於てもマカロックはその前にリカアドオに教へられた説のリカアドオ自身に依て訂正せられることに不平の意を表したが、リカアドオはマカロックに與へた返書に別の假設例に由て再び詳細に其説を述べ、機

械採用の爲め労働者の一部分が解雇せられるといふ眞理は予の見るところを以てすれば幾何學上の眞理の如く明白であつて、たと予の久しく之を認め得ざりしを驚くのみなることを告白する」と言ひ (Letters to McCulloch, p. 109) マカロックも後に至つて「機械に關してリカアドオ氏が假想せる場合」の「あり得べき」ことを認めるやうになつた (Principles of Political Economy, 1825, p. 165)。

此事はリカアドオ其人の常に眞理を求めて倦まず既得のものに苟安を窺むことをせぬ性格を示すものである。而してリカアドオ價值論に於ては自説に訂正を加へたことは前述の通りであるが彼れは殆ど其病没の日に至る迄異見者との論争を怠らず、遂に積極的に自説に満足することなくして終つたのである。

一八一七年「原論」を著した後のリカアドオは、功成り名遂げた人であつた。彼れは富豪となり、議員となり學者としての名聲を得た。其原論は當時の新思想家たる「功利主義者の聖典となつた」(Leslie Stephen)。議會は通貨問題に關する最高權威として彼れの説に傾聴した。而かも其間にあつて、リカアドオ自身は己れの學説

に満足せず、其價值論の價值に疑惑を懷いて、結局正確なる價值尺度なるものは見出すことが出来ぬものだといふ消極的結論に到達したのである。此間の消息は、彼れのマルサス宛及びマカロック宛書簡集に由て窺はれる。彼れは一方貨物の價值を決定するものは投入労働量であり、投入労働量のみであると主張するジェムス・ミル、及びマカロックに對しては、労働投入より生産物販賣に至る迄の時間も亦た價值を與かり決することを力説し、他面價值の尺度たるものは労働と交換せらるゝ貨物量なることを主張するマルサスに對しては、生産上に投入せられた労働量の方がより良き尺度なることを辯じたのである。

一八二二年リカアドオは人を以て示されたマカロックの講義草稿を見て、マカロックの意見が單純に失ふことを指摘した。貨物の價值はマカロックの言ふ如く生産上に投入せられた労働量のみによつては決定せられぬと謂ふのである。リカアドオは葡萄酒の貯藏と植林の例を引いた。葡萄酒は久しく貯藏せらるゝことに由つて價值を増し、又植林に就いては、當初二志の労働を費して植附けた櫛樹が年を経て百磅の價值を有するに至ることがある。此の價值の増加は労働を以

てしては説明せられぬ、と言つた。マカロツクは是に對して、三年間貯藏せられた葡萄酒は一日貯藏せられた葡萄酒よりも多くの労働が費されては居らぬけれども、此の時間に基づく價値の増加は、同額の資本が労働の雇傭に充てられた場合に、同時間内に行ふべき蓄積に由て之を算定しなければならぬ。又二百年間成長した樹に現に費された労働量は極めて僅少ではあるが、其價値は投入せられた當初の労働が同時間内に生ずべき資本蓄積に由て之を算定しなければならぬといふのであるが (Letters to Malthus, p. 222) リカアドオは「此の蓄積利潤を呼ぶに労働の稱を以てし、又斯くして一百磅の價値ある貨物を之に投せられた労働量に比例して價値ありといふこと」を失當となし「始め労働に二志を費し、後に百磅の價値を有するに至つた此樹には斷じて其價値二志以上の労働は投せられてゐない」のだと謂つた (Letters to McCulloch)

マルサスは始め穀物と労働との價値の平均を價値尺度たらしむべしといふ説を立てたが (Principles, 1st ed. Sect. VII) 後に至つてアダム・スミスと同じく一貨物と交換せらるゝ労働量即ち「支配せらるゝ労働量 (labour commanded)」が其物の價値を測定すべき尺度だと説くやうになつた。「一地一時代に於ける一貨物自然價値の尺度は其地其時代に於てその自然普通の状態にある時、其貨物と交換せらるべき労働量である」 (Definitions in Political Economy, 1827. p. 243)。此意見は既に一八二三年に著された價値尺度論 (The Measure of Value stated and illustrated etc.) 中に發表せられた (p. 16)。

リカアドオは前にアダム・スミスの同じ意見を非としたやうに、此のマルサスの意見を非とし、その後者に與へた、一八二三年四月二十九日附のものより、八月三十一日附のものに至る六通の長文書簡に、繰返して其理由を述べた。畢竟「支配せらるゝ労働」は物の尺度に缺くべからざる其自體の不變なる要件を備へてゐない。假りに疫病の爲め、人口が減少して舊の四分三に下つたならば、他の一切貨物と比較しての労働の價値は騰貴するが、マルサスは、労働の供給以外には何等の變動なきに拘らず、之を労働の價値騰貴と言はないで、諸貨物の價値が下落したと言ふであらう。是は斷じて失當だとリカアドオは謂ふのである (Letters to Trower, p. 210)。然らばリカアドオ自身の意見は如何といふに、彼れはマルサスと反對に「生産上

に大なる労働量投入せられた時にのみ高價なり」となす自説をば、決して完全無缺のものとは思つてゐない。彼れは僅にマルサスの提案が一層不完全なものだと言ひ得たに過ぎないのである。これはリカードが單純な労働價值説を放棄した當然の結果である。彼れはマカロックに告げていつた。「……價值は有りて有ゆる比例に混合せる賃銀利潤の二要素の複合より成るものであるから、貴下の尺度が測定せらるゝ貨物と賃銀利潤の比例に於て正しく一致するにあらずんば精確なる測定を行はんとすることは無益である」(p. 177)。マルサスに向つても言つた。「……困難は労働と利潤とに歸屬する比例の異同に關して存する」。而して労働利潤の比例の變動より生ずる變動に對しては、「未だ曾て何等の價值尺度は存在しなかつた。而して予は遂にその存在せざるべきを信する」(p. 237)。更に言つた。「問題は不變なる價值尺度に關する……。予は予の尺度の不精確なるを認め、併し、それは予の尺度が貴下の尺度が爲し得ると言ふ一切の事を爲し得ぬからではなくて、予が其不變性を信せぬからである」。議論は遂に決せず終つた。「併し是等の議論は決して我等二人の友誼に影響せぬ。假りに君が予の説に同意し

ても予は君を、今敬愛するより以上には敬愛せぬであらう」(pp. 239, 240)。これがリカードの病死の十一日前八月三十一日に書かれた書簡中の文言である。

價值尺度に關する論争は、リカードの死後にも續いて行はれた。リカードの辯護の爲めに起つたものは、阿片喫用者「ドクインシイ」であつた。彼れは價值の原因 (ground) の價值の標準 (criterion) とを嚴別し、リカードの學説は前者を説明せんとするもので、後者には關係なきこと、又此事を辯別しなかつたマルサスの價值尺度論の取るべからざる所以を力説した。彼れは寒暖計を例に引いた。寒暖計は氣温測定の標準ではあるが熱の原因ではない。リカードが求めたものは此の原因の意味に於ける尺度であつて、標準の意味の尺度ではない。又經濟學上至要の問題は獨り價值原因論にのみ存すとなし、マルサス等は價值尺度の發見に重きを置き過ぎたと謂つた (De Quincey, Malthus on the Measure of Value, 1823.—Dialogues of Three Templars on Political Economy: Chiefly in Relation to the Principles of Mr. Ricardo, 1824. The Collected Writings of T. De Quincey by D. Masson, vol. IX.)。

リカード批評家のサミュエル・ベネリイ (Samuel Bailey) も價值の尺度と原因と

を區別し、又一貨物に投入せられた労働量は之を確知することが出来ぬ。之を實際に適用することが出来ぬ。實際に適用し得ぬ價値の尺度は無價値だと謂つた。同時に彼れは價値が相對的概念なることを力説するものであるから、其自體の價値不變なる價値尺度のあることを認めず、従つてマルサスの價値尺度論をも是認しなかつた (A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. 1825)。マルサスは遂に其説を改めなかつたが、後に至つて價値の原因と尺度とを分つて、「一貨物に費された労働は其價値の主要原因ではあるが、其尺度ではない。……一貨物が支配する労働は其價値の原因ではないが其尺度である。」と言ふやうになつた (Principles—2nd ed. 1836 p. 83 n.)

リカアドオがマルサスと説を戦はして、而かも遂に意見の一致を見るに至らなかつたものに、猶ほ過剰生産理論がある。「生産物に對して販路を開くものは生産物であるから、特定生産物の需給不適合といふことはあつても、一般的生産過剰といふことは起り得ないといふのが有名なセエ (J. B. Say) の市場理論であるが、ジェ

エムス・ミルは一八〇八年スペンスを駁撃する貿易辯護論中にセエと同じく貨物は貨物とのみ交換せらるゝものであるから、貨物の一半は常に他の一半に對する市場を造るものであつて、一般的生産過剰は不可能だと説いた。

リカアドオもセエ・ミルと同意見であつて、其原論中にセエの名を舉げて、彼れが「抑も需要は生産に依てのみ制限せらるゝものであるから、一國內に於て使用され得ぬ資本額といふものはないといふ事を遺憾なく示した」と記して居る。リカアドオは謂ふ、「生産物は常に生産物又は勤務に依て購買せられ、貨幣は單に交換を行ふ媒介物に過ぎざるものである。特定貨物が餘りに多く生産せられ過ぎて、それに費された資本を償はぬ程の供給過剰が市場に起るといふことはある。併しそれは一切の貨物に就いては有り得ないことである」。即ち一般的に生産が過多なる爲め、労働者賃銀は低廉なるにも拘らず、資本利潤が減少するといふことは有り得ないと言ふのである。たゞ一つリカアドオが認めてゐる例外がある。それは各人が奢侈的消費を全廢して、資本蓄積の一事にのみ熱中する爲め、消費し切れぬ程の生活必需品量が生産されるといふ場合である。斯く限られた數の貨物に就

いては、確かに一般的供給過剰といふことが起り得るけれども、此事を容認しても一般的原理は傷けられるものではない。それは例へば英蘭の如き國に於て、其國の全資本と勞働とを擧げて、必需品の生産のみに投じようとする傾向があらうとは想像し難いことだからである。

此意見をリカアドオは、原論著作以前からマルサスに向つて主張した。例へば、彼れは一八一四年十月二十三日附の書簡中にも斯う言つて居るのである。「予は人類の欲望及び趣味に結果を歸することに於て遙に貴下以上に出で、居る。予はその無際限なることを信ずる。彼等にたとへ購買手段を與へよ。然らば彼等の欲望は飽和し難きものである。ミル氏の理論は、此認定の上に建てられて居る。此理論は資本蓄積の結果生産せらるべき諸貨物が相互に如何なる比例に立つであらうかを言はんこそせず、たゞ人類の欲望と趣味とに適合する貨物のみが生産される——其以外のものは需要せられぬから——ものと假定するのである(5. 40)。

セエーミル—リカアドオの一般的生産過剰不可能論に對してマルサスは其原論の一節で(初版第三五四頁以下第二版三一六頁以下)之を駁した。第一に、若しも生産物にして相互に比較せられ、交換せらるゝに過ぎぬとすれば、生産物が同時に同じ割合で増加すれば依然同じ相對價値を保つであらうと云ふことは眞理たるを失ふまい。「然し、吾々が當然しなければならぬやうに、之を消費者の數と欲望とに比較すれば、消費者の數が稍々靜止の状態に居り、欲望が節約の爲め減退して居る所に於ては、生産物の大なる増加は必ず勞働を以て測れる生産物の價値に大なる下落を來たさざるを得ぬ」。第二に、彼等は人間の怠惰及び安逸欲の影響を顧慮してゐない。「人は常に怠惰よりも贅澤を欲し、各當事者の利潤は收入として消費されるものと認定せられて居る」。然し、人が贅澤よりも怠惰を欲するの結果は、明に増進せる生産力の収益に對して需要の缺如を來たし、勞働者を失職せしめるであらう。第三の最も重大なる誤謬は、蓄積が需要を保障するものと思惟すること、換言すれば、目的貯蓄にある人に依て雇傭せらるゝ勞働者の消費は、生産物の繼續的增加を奨励するが如き有效需要を造り出すであらうと思惟すること」に存する。これがマルサスの認めてセエーリカアドオの誤謬とするものである。

マルサスに與みしてセエーリカアドオに當つたものは、シムモンデ(J. C. L. Simonde

te Sismondi)であつた。シスモンデはリカアドオが旅行の途次(一八二二年)ジュネ
エヴに數日滞在した時、彼れと親しく此問題を議論した。彼れの過剰生産論は其
の「新經濟學原理」(Nouveaux principes d'économie politiques, ou de la richesse dans ses rapports
avec la population, 1819.)「社會科學研究」(Études sur les sciences sociales, t. II: Études sur l'éco-
nomie politique t. I. 1837)に説かれてゐる。彼れが財産及び所得分配の不平等が生産
過剰の原因となることを説いたのは、人の知る通りである。十萬リイヅルの所得
が百の家族に平等に分たれた場合には、各家族は其衣食住を向上せしめることに
依て農工業生産物の販路を擴大するが、反之十萬リイヅルの大部分が一人の手に
歸して、一人の富豪と九十九人の貧者とがある場合には、一國産業に與へられる刺
戟は、右の場合よりも遙に少なからざるを得ない。富者の出現は資本の増加を促
し、資本の増加は大工場への作業の集中を助長するが、斯る大工場の生産物は富者
の使用から遠ざけられ、而かも貧者の側の需要は決して多大でない。斯して販路
は却て狭ばめられ、更に此の供給過剰は世界的にも起り得ると彼れは謂つた(増井
幸雄「生産消費の均衡に關する論争」本誌第十九卷第四卷参照)。

リカアドオの生産消費均衡論に就いては、彼れは斯う謂つた。リカアドオの思
想は謬れる二つの前提に基づいてゐる。第一は生産の増加は必ず所得の増加を
意味するといふことであるが、生産の増加は往々損失を來たすに過ぎぬことがあ
る。第二は所得の増加は必ず消費の増加を意味するといふことであるが、所得の
増加は屢々より多くの財でなくて、より高き價格に於ての財の消費を意味するに
止まる。即ち若し農業技術の進歩に依て農業家が其收穫を増すことが出來たな
らば、彼れは決して今迄消費したより多くの製造工業品を需要せず、寧ろ此需要
を縮小して、所得の増加を贅澤品の購入に投ずるであらう。即ち彼れは既存の製
造業、即ち生活必需品製造業を衰退せしめて、今迄全く存在せざりし製造業、即ち奢
品製造業を呼び起こすであらう。同様に織物労働者生産力並びに所得が發明の
應用に依て増進した場合、彼れは其の穀物消費量を増加せしめず、寧ろこれを縮小
して食膳を美にし、斯る奢侈的農業を奨励するであらう。そこで農夫と織物労働
者とが歩を同うして其生産力を増進せしめ、而して兩者互に其生産物の購買者と
はならぬといふことが起る。同時に奢侈工業はより多くの労働者を要せずして、

より熟練なる労働者を要し、同じく奢侈農業即ち牧畜は耕作よりも労働者を要することが少ないといふことは注目を要する。(Etudes, p. 81)

リカアドオは營利主義經濟組織に對する悲觀論者ではない。彼れの悲觀主義の根據は、既述の如く、自然の人間の要求に應ずる力が益々減退するといふ觀察に基づいてゐる。彼れの過剰生産不可能論にも此思想を窺ふことが出来るのである。

「何、然らば富が一切で、人間は絶對的に何物でもないのか。」

リカアドオはシスモンデに會見した時、シスモンデは斯う叫んだと傳へられてゐる。敢てシスモンデたらざるも、リカアドオが經濟政策の問題を論ずるのに資本家の見地に立つて之を爲し、往々労働者の賃銀は利潤獲得の爲めの已むを得ざる費用なるかの如く説いたことは、否認し得ない所である。リカアドオの「刻薄なる物質主義」は「英國社會史」の著者アドルフ・ヘルド(Adolf Held)の痛烈なる非難を受けたが、ヘルドが指摘した「總收入及び純收入」の章では、リカアドオはシスモンデの

評言の正しく該當するやうな言葉を列ねてゐるのである。其に由ると、一國の土地労働の全生産物は賃銀利潤地代の三部分に分たれるが、租税として又は貯蓄の爲め多少とも控除をなし得るのは利潤及び地代のみからであつて、賃銀は「常に必要生産費を構成する」。二萬磅の資本を有し、一年二千磅の利潤を收める一個人に取つては、其利潤が二千磅以下に下降することさへなければ、其資本が幾人の労働者を雇傭するか、其貨物が幾許に賣れるかは問ふ所ではない。「一國民の眞の利害も亦た同様ではないか。其の純實所得、即ち其地代及び利潤が同一なる限り、其國民が一千萬人の住民を以て成ると一千五百萬人を以て成るとは問ふ所ではない。其の艦隊軍隊と有ゆる不生産的労働とを維持する力は總所得に比例せずして純所得に比例しなければならぬ。」若し五百萬人の人が一千萬人に必要な丈けの食物衣服を生産することが出来るならば、五百萬人分の食物衣服は純收入となる。「此の同じ純收入を生産する爲めに七百萬人を要するといふこと、即ち一千二百萬人分に足る食物衣服を生産する爲めに七百萬人を要するといふことは、國に取つて果して何かの利益となるであらうか」。純收入は依然として五百萬人分の食

物衣服である。「より多くの人を雇傭することは吾々をして我國の陸海軍に一兵を加へ、若しくは租税の納付に一ギニイを加ふることを能くせしめぬであらう」といふのである。

リカアドオは個人として決して冷酷無情の人ではなかつた。又彼れが眞理に忠實で、決して資本家階級の利害の爲めに意識して説を托げるといふことをしなかつたことも、恐らくデイルの辯護する通りであつたであらう(K. Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu D. R's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung Bd. II S. 455 ff.)。併しシスモンデやヘルド等の批評も亦た決して故なきものではない。彼れの人種閱歴は確かに彼れの對労働者態度に影響を與へてゐたのである。「リカアドオは批評家が否定すべからざる眞實を以て指摘する如く、猶太人で、株式取引所の一員であつた。然るに猶太人は：：而して確かに猶太人の株式仲買は當然人間的感情を持つて居らぬ。：：彼等は賃銀を以て計算の一項目となし、労働者を以て業務上に使用せらるゝ道具の一部分となす資本家たるに適して居る「レスライ・スチイヴン」。加ふるに彼れが人間對自然の關係を觀ることは前述の通りで

ある。故に彼れによれば、賃銀も人力を以て左右すべからざる自然率の支配を受けけるものである。「他の凡ての契約と同じく、賃銀も之を衡平自由なる市場の競争に委すべきもので、決して立法府の干渉に由て統御せらるべきものではない」(p. 102)。然らば労働者の境遇を改善する方法如何といへば、それは労働者自身に於て無分別な結婚を克制して、労働者の數の増加を制限する以外にはないといふのである。彼れが救貧法に反對したのも是が爲めであつた。議會に於て、貧家の兒童に無償にて食物及び教育を給せんとする或提案に反對したのも是が爲めであつた。同じくロバート・オオエン(Robert Owen)の共產社會設立の提案に反對したのも是が爲めであつた。議會議事記録が載する所に由れば、リカアドオは一八一九年十二月十六日、彼はオオエンの制度に全然反對するものである。此制度は經濟學の原則と相容れず、又彼れの見解に由れば必ず社會に取つて無限の不幸を伴ひ來るべき原則の上に建てられたものであることを言明した。

友人トラファに與へた書簡中にも、彼れはオオエンの計劃を評して下の如く謂つて居る。「オオエン其人は其得意の考案の爲め敢て大犠牲を拂ふことを意とせ

ぬ、仁慈なる熱情家である……。併し彼れは、救貧施設を支配すべき一切諸原理を全然承知して居らぬやうに私には見える。彼れはマルサスの學說を聞知して居り、其基礎となつて居る理由若しくは如何にして彼れの困難が軽減せらるべきかは知ることなしに之に對して反感を抱いて居る。オオエンは生産と稠密なる人口の幸福との爲めには土地以外に必要なものはないと思つてゐるらしい。吾人は土地を有する土地の生産力は更に之を増進せしめることが出来るから、人口は過剰に陥ることがないといふのである。——苟も道理の辨へある人が、オオエン氏と共に、氏の提案するが如き社會の繁榮すべきことを、人々が私利の念に依て動かされずに、社會に對する念慮に依て動かさるゝ場合、同數の人が前に生産したよりも更に多くを生産すべきことを果して信ずることが出来るやうか」(Letters to Trower, p. 79)

是が例へば、マルクスをして「リカアドオの學說は刻薄苛酷に全英國ブルジョワジイを代表し、英國ブルジョワジイ其者は更に近世ブルジョワジイ一般の典型である」と言はしめた所以である。

「職能經濟學」に就て

— 定型と個性の結合 —

勝 田 貞 次

經濟とは何であるかが判明しない間は經濟學の體系を打建てることは出来ないと言主張するものは恰も人生とは何であるかが判らない限り一步も生活することは出来ないと言主張するのと同じであつて甚だ迂遠な態度ではないかと思ふ、斯う云ふ態度は甚だ理想的かも知れないが余りに理想に過ぎて迂遠に傾かぬかと思ふ。

哲學者ショーペンハウエルは人生の本質を意欲に求めて居るが少くとも「要求」こそ人生に最も直接なる經驗であると思ふ、從てまた如何なる理論と雖も此の「要求」の事實を否定することは出来ない筈である。只自然科學の場合には理論の根底をなす「要求」の存在が痛感されない爲めに「理論の爲めの理論」が妥當するやうに思はれるのであるが社會科學の如く人類の行爲に接近して居る科學にあつては理論は常に要求の事實を根底に含む程度が大である。從て斯る社會科學の一分派である處の經濟學に於てもその概念構成の出發點となるものは要求の事實を最も濃厚に含む處の概念でな